

## [将来像] 11 個性を生かした地域の自立と地域間連携で元気を生み出す

生活を支える機能が身近なところに集積されるとともに、空間の有効活用が図られることでそれぞれの地域の潜在力が引き出され、個性豊かな地域として自立している。また、地域と地域の連携が深まり、互いの魅力を高め合って、活力ある地域づくりが進んでいる。

### キーワード

- ・集落での生活機能の確保 ・広域村づくり ・村移り ・二地域住居 ・集落外からのむらづくり参画
- ・生活機能の集約化によるまちなかの形成 ・空き空間の有効活用 ・職住学近接
- ・高齢世代と若年世代との住替わり ・二戸一住宅や減築によるゆとり ・多世代共住の推進
- ・垂直コミュニティと既存コミュニティの連携 ・地域資源の再評価 ・行政界を越えた広域連携

### 夢提案

- ・過疎化が進む課題を抱えているが、今ある自然を大切に、他の町と交流を深めることで、豊かで住みやすいまちづくりができるのではないかと考えている。(たつの市在住中学生)
- ・住んでいる町を自然は残しつつ、子どもからおじいさん・おばあさんまでが安心して暮らせる町にしたい。(宝塚市在住中学生)

### 将来像のあらまし

#### (1) 農山漁村では、空き空間が管理・活用され、豊かな個性を生かす村づくりが進められている

- ①広域的な村の連携で、集落生活のために必要な機能や豊かな地域資源を生かしたしごとが確保され、安心して生活できている
- ②持続困難な集落の中には、自らの選択で近隣集落へ村移りする集落もあるが、移転後の空き空間を活用するしくみが整っている
- ③エネルギーや食の自立が高まり、他地域への供給が進んでいる
- ④まちからむらへの人の流れが大きく増加し、外部との交流で集落が活性化している

#### (2) 疎住化が進む多自然地域などの地方都市では、まちなかへの生活機能の集約が進んでいる

- ①まちの無秩序な広がりを抑えつつ、コンパクトなまちへと生活機能が集約化されている
- ②空き店舗、廃校舎などの空き空間が住民ニーズに応じて活用されている

#### (3) 都市郊外のニュータウンは世代バランスがとれ、ゆとりとにぎわいのある空間になっている

- ①若年世代が住み加わり、ゆとりある美しいまちなみに二戸一住宅などで広く居住している
- ②職住学が近接しており、昼間もにぎわいのあるまちになっている
- ③空き空間を有効活用し、エネルギーや食の自給力が向上している

#### (4) 瀬戸内臨海部の都市では、大都市ならではの多選択・多参画型のまちづくりが進んでいる

- ①高齢者が増加する中でも、多様な住まい方、多世代交流の場が創出され、安心して暮らせるまちになっている
- ②駅前や街路などが高齢社会に対応した生活空間として再構築されている
- ③工場や業務機能の集約化が進み、空き空間でその都市ならではの商業やサービスが盛んになっている

#### (5) 地域資源が保存・継承され、地域への愛着が育まれ、地域の魅力となっている

- ①美しい景観や有形無形の歴史・文化・遺産が大切に継承されている
- ②さまざまな地域資源がネットワーク化され、新たな地域の付加価値を生み出している

#### (6) 行政界を越えた地域間連携が進み、広域的に地域づくりができるようになっている

- ①自動車移動を前提とした地域構造から公共交通を軸としてつながる地域構造へと転換している
- ②地域の競争力向上、自立的な圏域形成を求める動きから、都市間・地域間の連携、県境を越えた広域連携が進んでいる

**(1) 農山漁村では、空き空間が管理・活用され、豊かな個性を生かす村づくりが進められている**

**① 広域的な村の連携で、集落生活のために必要な機能や豊かな地域資源を生かしたしごとが確保され、安心して生活できている**

- －集落間のつながりが創造され、広域的に集落の運営がなされている。
- －集落行事や歴史文化資源、集落景観など地域特色を生かした複数集落のつながりの核ができています。
- －空間を地域同士の公共財として活用できている。
- －地域資源や日常生活から生まれた、若者、高齢者、女性に応じたなりわいがある。
- －多自然地域に対応した医療・福祉、買い物、金融、宅配、図書館などの生活関連サービスが広域村づくりによって確保できている。

**始まっている取組等**

**<集落間連携による地域づくり>**

- ・地域づくりの担い手不足をカバーするため、複数集落からなる自治組織や営農組織の設立が始まっている。

**＝奥銀谷地域自治協議会（朝来）＝**

「地域の問題は地域に住まうみんなで解決していこう」との考えの下、地域の8地区が2008年（平成20年）に協議会を設立。地域ぐるみで、防犯、福祉、空き家・空地対策のほか、都市との交流に取り組んでいる。



奥銀谷地域自治協議会（朝来市生野）

**<住民主体での公共交通の確保>**

- ・バス事業者がバスを運行していないところでは、住民自らがコミュニティバスを運営。地域ニーズに合うよう、運行ルート、時間帯をきめ細かく定めることで、利用者が増加し持続的に運営されている。

**＝住民ボランティアによるバスの運行（丹波）＝**

ボランティアが交替で運転手を務め、診療所、郵便局ほか地区内の30を超えるバス停を経て、地区外のスーパーマーケットを回る。ワゴン車は、夜間防犯パトロールや子ども見守りパトロール、閉じこもりがちな高齢者の外出支援ツアーなどにも活用されている。



鴨庄ふれあいバス（丹波市市島）

**<地域資源の活用が地元の「しごと」へとつながる>**

- ・地域資源を生かし、内外にPRすることで地域が活気づいている。

**＝地元産品を使った商品を開発（多可）＝**

「マイスター工房八千代」は、八千代町で暮らすごく普通の女性たちの生活研究グループ「乙女会」メンバー20人を中心に、2001年（平成13年）にオープンした。地元産品を用い、手間や工夫、具材をたっぷり使用した高い品質の巻き寿司のほか、佃煮や漬物、ジャムなどさまざまな商品やメニューを提供している。

開店後は徐々に売り上げを伸ばし、今では開店前から客が行列し、地域に根ざした活動を展開している。



地域の農産物を使ったアイデア商品づくり（多可）

## ＝地域資源を地域のシンボルとしてPR（北播磨地域）＝

巻き寿司を北播磨地域における地産地消のシンボルとして取り上げ、地域の食文化と生活を広く県内外にPRするイベント「ハートにぐるっと！北播磨巻き寿司街道 ～北播磨のおいしいとこ全部巻き込みました～」が2010年（平成22年）8月に実施され、28,000人の来客を集めるなど盛り上がりを見せた。これは、北播磨地域の農産物加工グループが誇る「ふるさと巻き寿司」の取組を、広く県内外にPRするとともに、地域製品の売上向上や活動のさらなる発展をめざしたものである。

イベントを契機に、巻き寿司向け食材の新たな産地づくり、地産地消の推進、食育の推進、交流人口の増大等を目指して地域の資源を幅広い角度から活用、地域の活性化へつなげる試みとなっている。

### 県民の意見

- ▶ 地域で株式会社をつくって利益を出し、地元還元するといったことができれば、若い人の働く場所もでき、もっといい社会になるのではないかと。（阪神北地域夢会議）

## <校区単位等での生活関連サービスの確保>

- ・生活関連施設の維持に必要な人口規模と対応する地域単位ごとに施設の集積を図りながら、コミュニティバスなどの公共交通とも連携する取組が見られる。集落の安全安心を担うため、住民が出資し合って施設を経営、運営することも考えられる。

### ＝村営ふれあいマーケット（神河）＝（再掲）

神河町長谷地区の住民が資金を出し合って株式会社をつくり、店舗とガソリンスタンドを経営。県民交流広場を併設したことで、高齢者だけでなく、子連れのイベント参加者などが立ち寄る住民の交流の場となっている。



ふれあいマーケット(神河町)

### ＝移動販売車による生活品の提供（佐用）＝（再掲）

さようまち・むら両立プロジェクト協議会が主体となり、山間地域などの移動困難地域と商店街を移動販売車で結ぶ取組を始めた。商店街の空き店舗を活用した農産物集荷・配送拠点をつくるとともに、移動販売車を活用して山間部の集落で食料品、雑貨などを販売している。



移動販売車(佐用町)

### 県民の意見

- ▶ 集落の合併・統合は難しい。既存の集落の上に協議会的な組織を作って、集落間の連携を図るようにするのがよい。（豊岡市奥赤住民）
- ▶ 高齢者の社会参加、交通の手段が非常に重要である。高齢者が家に閉じこもることがないように、地域に出でいけるための手段が大切である。（丹波地域夢会議）

### 専門家の意見

- ▶ 店頭での販売以外に、売れ残りの野菜で惣菜を作って、車で売りに行くようにすると、お年寄りが買ってくれるようになり、売り上げが上がった。（住民共同出資の雑貨店経営者）
- ▶ 元気なうちはどんどん外出する、コミュニケーションを持つことが喜びや生きがいにつながっていく。（長期ビジョン審議会委員）

## 取組の視点

- ◇集落間連携による地域経営の実施
- ◇生活を支えるコミュニティバスや宅配サービスの整備
- ◇地域課題を地域の「しごと」で解決

- (1)②持続困難な集落の中には、自らの選択で近隣集落へ村移りする集落もあるが、移転後の空き空間を活用するしくみが整っている
- －集落の機能移転に向けての移住支援や、生活圏の再編に向けた取組を、近隣集落が連携して行っている。
  - －持続困難な集落の村移り後の空き空間をまるごとうまく活用できている。
  - －集落の耕作放棄地や空き家などの空き空間の再編と利活用が進んでいる。

## 始まっている取組等

### <むらの機能ごとふもとへ移住>

- ・廃村によりふもとへ移住した過去の事例や反省点を踏まえた対応方針の決定、準備が必要となる。



昭和30年頃の金山集落



金山廃村の現在(豊岡)



金山廃村を訪問(豊岡)

1962年(昭和37年)12月25日、最後の住民が村を出て、500年の歴史を閉じた金山廃村(豊岡市日高町)。  
 左写真:1955年(昭和30年)頃の集落の様子。  
 中央写真:現況。人家の痕跡である石積みが残るが、緑に覆われ生活の痕跡はごくわずか。  
 右写真:村の入口となる土橋付近。金山廃村に至る道は現在、蘇武岳登山道になっている。

### 旧日高町の金山集落、最後の住民が語る

- どの家も鉄砲を持っていて、よく一緒に狩りに出たものだ。うさぎ狩りの他には、そばを打ったり、川ににじますを放流して、にじますを食べたりした。どぶろくも作っていた。
- 住民が金山を離れた一番大きな理由は、子どもの教育。

### 専門家の意見

- 集落からの撤退は、そこに住む人が意志決定するものであるべき。撤退のために、知識、情報、ノウハウ、人材を投入して一緒に考えようというようにしたほうが良いのではないか。
- 移り住んでもらうための受け皿(住居、サービス)を、平地で用意しておくのが先ではないか。山奥の人たちを受け入れる先(ふもと)を地方都市の中心部とするのも一つの考え方である。(兵庫の将来像研究会)

### <空き家を生かした大学サテライトの設置>

- ・地域をフィールドに研究・教育活動を展開し、地域づくりに参画する大学が増加している。

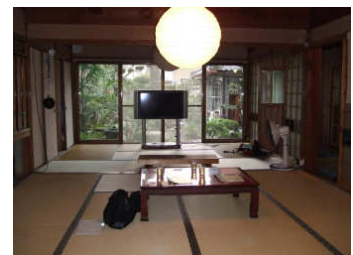
＝「関西大学丹波青垣フィールドスタジオ」(丹波)＝

関西大学と丹波市が連携協定を締結。大学が現地の空き家を借り受けて再生し、活動拠点化。

大学スタッフが半常駐し、同市をフィールドに教育研究活動を展開。地域づくりに思いを持つ住民の交流拠点としても利用が広がる。



関西大学サテライト(丹波)



関西大学サテライトの内部

<他の事例>

○神戸大学農学部「篠山フィールドワークステーション」

・大学と篠山市が連携協定を締結し、市が直面する食料・農業・農村問題の解決をめざす連携研究を展開している。

○関西学院大学総合政策学部「関学柏原スタジオ」

・大学が柏原市街地の空き家を借り受けて JR 柏原駅周辺の市街地活性化に取り組んでいる。

○兵庫県立大学山南スタジオ

・大学と丹波県民局、丹波市の三者による連携協力協定を締結し、丹波地域の人的・知的財産や特色ある資源の活用を図り、地域づくり、教育・文化の振興、人材育成、学術・研究などの分野で相互に協力し、活力ある地域の形成、発展に取り組んでいる。

<市民活動団体が集落への学生の受入を支援>

・地域をフィールドにしようとする学生たちが活動しやすくなるよう支援する活動団体も生まれている。

＝学生と地域をつなぐ市民活動団体（三田）＝

市民活動団体ぽっぽプランでは、平成 21 年の台風 9 号災害の支援のために、学生と共に佐用町に関わったことをきっかけに、佐用町若州集落の空き家を借りて、フィールドワークのために訪れる学生の受け入れ環境づくりや活動支援などに取り組んでいる。



古民家の清掃体験をする学生

県民の意見

➤ 都市との交流では、団体間の継続的な交流の関係を作っていくことが重要である。  
(豊岡市奥赤住民)

専門家の意見

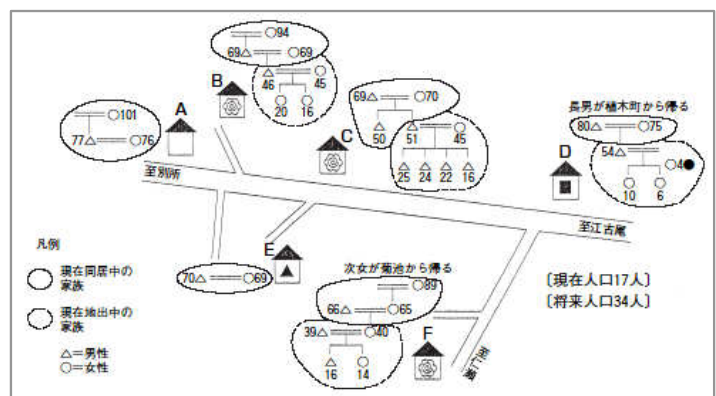
➤ 4 年間の活動の成果は小さなもの。大きな変化、大きな成果を追求すると活動が持続しない。地域の実情を知って適切に取り組むには、地域に長期的に関わるしくみが必要。  
(関西大学丹波青垣フィールドスタジオ研究員)

<集落点検と土地の棚卸し>

- ・集落の現状を家族の動向を基準に捉え、集落から転出した人の状況も把握した上で 10～20 年後の集落を考える「T型集落点検」の取組が、県内でも始まりつつある。
- ・集落内の土地一筆ごとに利用状況、所有者の状況や後継ぎの有無などを明らかにする「土地の棚卸し」により 10～20 年後の集落空間の姿を考えることができるようになる。

＝T型集落点検＝

家族の関係性を T 型になぞらえて、各家庭に居住する人だけではなく、その子ども、親戚などの関係性を家系図のようにまとめた上で、U ターンしそうな人をチェックし、10 年後の各世帯、集落の姿を描くことで、そのために何をすべきかを考える一助とすることができる。



熊本大学教授（農村社会学者）が提唱する「T型集落点検」例

### ＝10年後の集落点検づくり（豊岡）＝

豊岡市日高町小河江集落（平成21年9月時点11世帯）は県内で初めて、将来の集落の姿を考えながらT型集落点検づくりに取り組んだ。

（写真：兵庫県総合農政課提供）

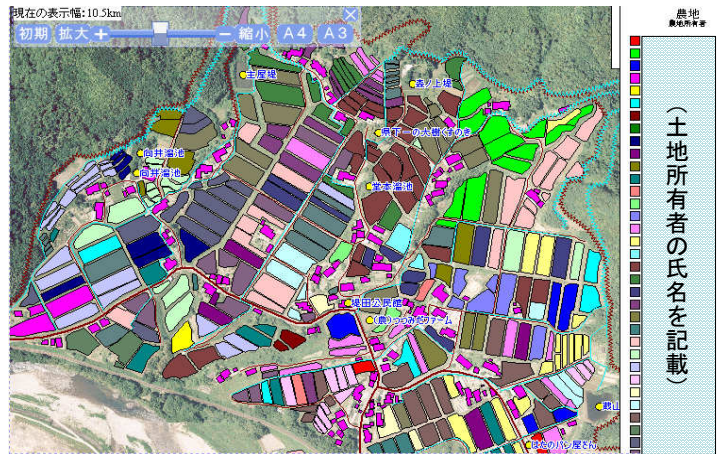


T型集落点検の様子（豊岡市小河江）

### ＝土地の棚卸し＝

集落内の土地一筆ごとに、利用状況、所有者の状況、後継ぎの有無などを明らかにすることで、10～20年後の集落空間の姿を考えることができる。

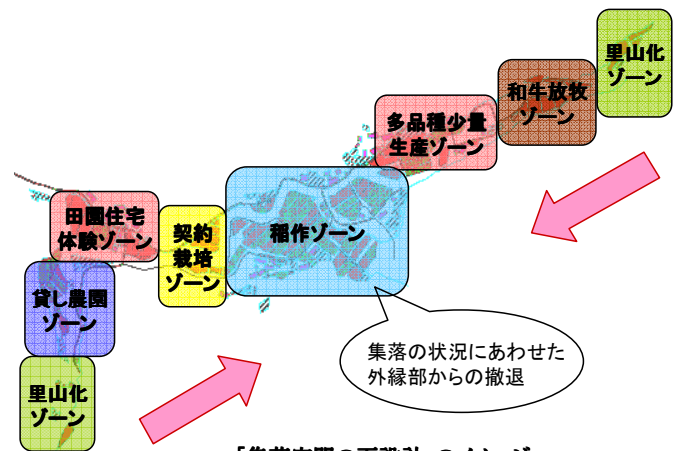
右図：「土地の棚卸し」の実施例  
（島根県津和野町のある集落）



（島根県中山間地域研究センター提供資料を加工）

### <村のビジョンづくりと空間管理>

- ・土地の棚卸しやT型集落点検で、集落空間の利用状況の把握や将来の管理状況を予測し、土地利用の効率化を図る必要がある。
- ・集落外縁部から徐々に利用空間を狭めるなど、土地利用の効率化を図ることで集落機能の維持に向けた合意形成を推進することが大事である。



「集落空間の再設計」のイメージ

（出典：島根県中山間地域研究センター資料を基に兵庫県ビジョン課作成）

### 取組の視点

- ◇ むらの存続の議論にあたっての専門家などによる支援
- ◇ 持続困難な集落におけるむらの機能移転支援と住民の生活支援
- ◇ 放棄する集落、田畑、森林の管理のあり方の検討
- ◇ 大学・研究機関などと課題を抱える地域との出会いの場の創出
- ◇ 地域と大学等が長期間関わることができる環境を維持するための大学等の活動資金、地域の受入れ体制などの確保
- ◇ 空き家、耕作放棄地、荒廃森林の状況確認、不在地主も含めた所有者の意向確認
- ◇ 集落点検、土地の棚卸しのノウハウの蓄積、将来を見据えた適切な空間管理と空間の再設計
- ◇ 家屋、田畑、森林の一括管理による効率化に向けての土地の所有と利用の分離

(1)③エネルギーや食の自立が高まり、他地域への供給が進んでいる

- －多自然地域発で取り組む地域特性を生かしたエネルギーの自立・供給のしくみが普及している。
- －ブランド化された安全でおいしい食材が供給され、農林水産物の地域内や県内の地産地消が進んでいる。
- －エネルギーや食に関わるしごとがなりわいとして確かなものとなり、余剰分が都市などの他地域の自給を補完している。

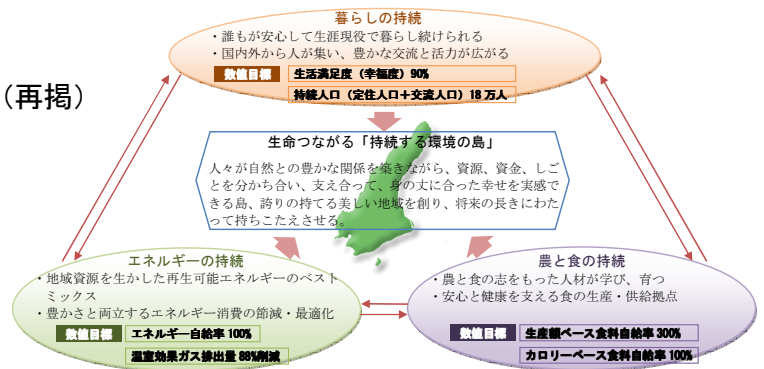
始まっている取組等

＜エネルギーや食の自給力の向上＞

- ・兵庫県のエネルギー自給率は、エネルギーの需要量も多いこともあり、全国 40 位と低く、食料自給率も全国平均の約半分と低い水準となっている。
- ・多自然地域を中心として地域特性を生かしたエネルギーや食料の生産基地として活用していくことも必要と考えられる。

＝「あわじ環境未来島構想」の推進＝（再掲）

淡路島では、「エネルギーと食料と水を自給自足する島」をめざす地域像とし、「エネルギーの持続」「農と食の持続」「暮らしの持続」の総合的な取組を、2050年を目標に進めている。



＝農業と共存共栄するバイオエタノール製造（明石）＝

農林水産省のソフトセルロース※利活用技術確立事業の一環として、県内企業、団体と連携して専用設備を整備。稲わらや麦わらなどの非食用植物を原料としたバイオ燃料製造技術の実証施設として竣工され、日本酒製造に用いる酵母を応用活用するなど、環境親和性のある手法により、国内農業と共存共栄できる地産地消型のソフトセルロース利活用の道を拓くことをめざしている。

※ソフトセルロース：稲わらなどの農産物の非食用部など

「あわじ環境未来島構想」の取組の柱



兵庫県ソフトセルロース利活用プロジェクト(明石)

＝農林水産物の地産地消への取組＝（再掲）

県産食品の安全性や特長等を確認・認証する「ひょうご食品認証制度」に基づく認証食品の認証数が着実に増加しており、加工食品についても地産地消が進んでいる。食品産業と農林水産業の連携による県産物にこだわった新たな加工食品の開発の取組が始まっている。

専門家の意見

- 多自然居住地域の集落の安全安心は、自家エネルギーだという位置づけもあり得る。(将来像研究会 地域構造チーム)

取組の視点

- ◇太陽光、小水力、バイオマスなど地域特性を生かした創エネ
- ◇遊休地や休耕田など広大な空間を有効活用したエネルギー、農林水産物の生産
- ◇エネルギー・食の自給力向上と他地域への融通のしくみづくり

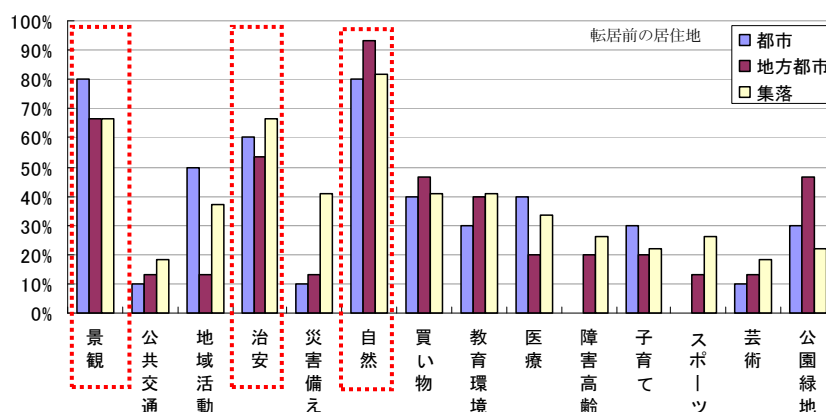
- (1) ④まちからむらへの人の流れが大きく増加し、外部との交流で集落が活性化している
- 都市部から農山漁村で暮らす人の流れができ、モノ・情報も双方向で行き交っている。
  - 集落外の人々が村づくり、地域づくりに継続的に参画している。
  - 集落外からの季節的、短期的な滞在による集落の活性化に向けた支援体制が整っている。
  - 都市住民が農や自然に親しむ、集落での週末居住などの半村半都や二地域居住が定着している。
  - 農業技能の継承や空き空間の活用など、村の課題解決に取り組む専門人材が増え、活動している。
  - 集落文化・資源を活用したツーリズムや自然の癒しを活用した居住・滞在のしくみが整っている。

## 始まっている取組等

### <集落での生活の魅力>

- ・集落へ移住した人たちの多くは、自然、景観、治安の良さを評価している。これらの魅力を生かす取組が求められる。

【集落へ5年以内に転居した人の生活要素に対する満足度】

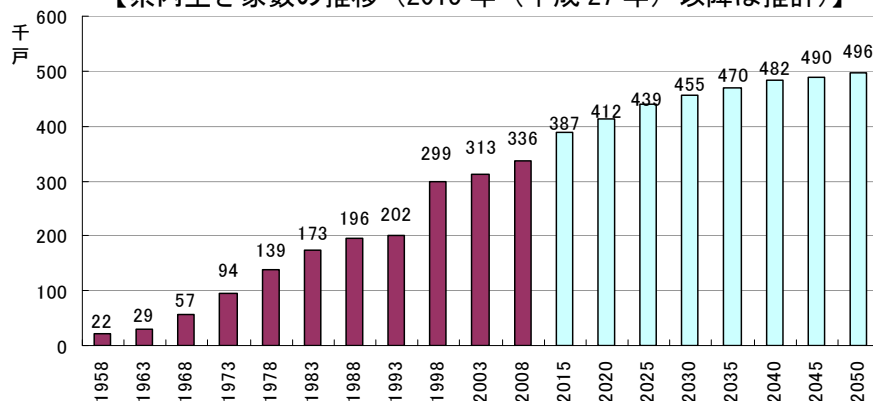


(出典：兵庫県「美しい兵庫指標」県民意識調査(平成20年度))

### <増加する空き家を活用して都市住民と交流する人が増加>

- ・人口減少に伴い今後も空き家・空き施設が全県で増加していくが、都市住民が村で暮らすための住居の選択肢が増えることにもなる。

【県内空き家数の推移(2015年(平成27年)以降は推計)】



(出典：人口減少社会の展望研究報告書(平成17年3月兵庫県人口減少社会の展望研究プロジェクトチーム)を基に兵庫県ビジョン課が再推計)



## <新規就農の支援>

＝就農相談や農地探しの支援を行うNPO（丹波）＝

神戸のメーカーで勤務していた者が市島町を訪れ、その後就農。地元食材の地元消費を目指し、地域の農業を活性化しようとNPO法人市島丹波太郎を設立した。

農産物の直売所を運営するほか、新規就農をめざす人たちのため、就農相談、住まいや農地探しの支援を行っている。



同法人が開発した米粉ラーメン(丹波)

## <小規模集落が抱える農などの課題を都市住民がサポート>

＝農を介したむらとまちの交流による地域の活性化＝

あこがれ千町の会では、むらの問題はまちに跳ね返ってくるという考えのもと、一宮町千町住民と都市住民とが農作業の協働作業や交流会・祭りなどのイベントを共同で実施。

放棄田の耕作地への再生やむらの野菜を中心とした農作物の生産加工・販売も共同で行い、むらとまちのにぎわいが創出されている。



むらの農作物のPR販売

### 県民の意見

- 都会の人が来てくれるのは歓迎。外部から刺激を受けるよい機会と思う。  
(豊岡市須野谷住民)
- 高齢化がかなり進んでいるが、若い力を地域に呼び込んでやっていけたらよいと思う。  
農業に付加価値をもう少しつけてやっていけばよいのではないか。

### 専門家の意見

- 学生に農村での仕事や生活の面白さを意識づけすることが必要。(2040年の兵庫研究会)

## <二地域居住を含む多自然居住の広がり>

- ・都市住民の田舎暮らしを支援する団体や各市町の「空き家バンク」を介して、都市部からの住み替えや二地域居住の取組が行われている。

＝「いなか暮らし塾」での農村情報交換（朝来）＝（再掲）

田舎暮らしを考えている人たちや田舎の生活を体験したい人々を対象に、“田舎体験事業”を実施したり、古民家などの情報提供を行い、最終的に“田舎で暮らす”支援を実施。農業体験、OB訪問などを通じて、都市住民の田舎暮らしを後押し。U・Iターン経験者が集い、情報交換も行っている。



いなか暮らし塾(朝来、多々良木)

＝都市農村交流に取り組む地域のNPO（南あわじ）＝

NPO法人ふるさと応援隊は農村ボランティアの受入、就農の支援など都市農村交流事業に取り組んでいる。

活動の一環として、古民家を所有者から借り受け、都市住民の居場所となる交流拠点として再生（右写真）。農家民宿としても活用されている。都市から田舎暮らしのため移り住んだ方が管理人を務め、レストランを運営している。



農家民宿 薫陶の郷(南あわじ)

＝県内各地での空き家バンクによる二地域居住の取組＝（再掲）

空き家の活用のため、県内市町などが主体となり、空き家などの情報を集めた「空き家バンク」を設置。

インターネットなどでの情報発信により、田舎暮らしや二地域居住の希望者と空き物件所有者をマッチングする取組が行われている。

丹波市商工会では、空き家・古民家見学バスツアーを実施するなど、田舎暮らしを希望する人をサポートしている。



空き古民家(養父、畑地区)

＝都市部では体験できない田舎ならではの

貴重な体験（新温泉）＝

新温泉町いなか体験協議会では、都市部では体験できない田舎ならではの貴重な体験を通じて、自然の素晴らしさ、人間の知恵、人と自然の共存の大切さなどを経験してもらうため、子どもたちの農山漁村長期宿泊体験活動の受入を、地域が一体となって行っている。



海の恵みを体感する地引き網体験(新温泉)

＜集落居住者や二地域居住者などによる文化活動が展開＞

- ・集落に住みながら芸術など文化活動が盛んに行われるケースもある。

＝廃校での芸術活動の展開＝

映像作家の夫妻により、廃校となった小学校舎が改装され、芸術家の活動拠点として生まれ変わった。

職員室跡はカフェとして活用され、地域住民やさまざまな芸術家が集う場となっている。



芸術家の活動拠点・ハト村(淡路)

＜近隣集落間の協働や上下流連携が盛んに＞

- ・旧小学校区や旧村などに関わる集落共同での取組や、河川の上下流のつながりを通じた連携が盛んになっている。

＝ため池の浚渫などに取り組んでいる漁業者＝（再掲）

豊かな海を取り戻し、次代を担う若者たちに引き継ぐため、砂が締まって固くなった海の底を掘り返す、海底耕運に取り組んでいる。

また、栄養豊富なため池の水が海の魚介類を豊かにするとの考えから、ため池の泥さらいを農家と連携して行っている。



海を耕す道具

県民の意見

- 近隣の集落の活動は気になる。集落間の連携は、今後ますます必要になる。個々の集落が独善で動いてはいけない。
- もっと限界集落化していくと、元の小学校区（3集落）ないしは、より広域の資母地区という単位での連携を強めていかざるをえないのは確か。（豊岡市但東町住民）

### <農業体験・農村体験などのツーリズムの広がり>

- ・滞在型市民農園（クラインガルテン）など農を通じたツーリズムが広がりつつある。集落内の空き家と農地をセットにして活用する取り組むことも考えられる。

#### =クラインガルテン伊由の郷（朝来）=（再掲）

都市生活者に農業体験、農村体験を提供するために、残された棚田を活用し集落環境との調和を図りつつ交流施設を整備し、滞在型体験農園施設「クラインガルテン伊由の郷」を設置。地域の地区運動会、懇親会、稲刈り体験、収穫感謝祭など、多彩な行事での交流が進められている。



クラインガルデン伊由の郷(朝来)

### <さまざまな職種の人の定住>

- ・便利になる情報通信網を使って、集落で仕事をしたり、集落からインターネット上でのビジネスを展開する人も増えてくることが考えられる。

#### 専門家の意見

- ▶ 今はパソコンやメールでデータを送れる時代。田舎に帰ってきてでもできる仕事はいろいろある、という意識が大事である。（長期ビジョン推進委員会）

---

### 取組の視点

---

- ◇新規就農の育成と就農支援（マッチングなど）
- ◇新規就農者を現地でサポートする組織・人材の確保
- ◇都市住民への集落情報の効果的な発信
- ◇空き家の売買・貸借が容易な環境づくり
- ◇集落住民、都市住民双方の不安感の払拭
- ◇集落側の受け入れ体制の整備
- ◇長期休暇を取りやすい就業環境
- ◇いつでもどこでも誰もが簡単に情報ネットワークにつなぐことができる環境の整備

**(2) 疎住化が進む多自然地域などの地方都市では、まちなかへの生活機能の集約が進んでいる**

**① まちの無秩序な広がりを抑えつつ、コンパクトなまちへと生活機能が集約化されている**

- 市街地の中心地や公共交通軸周辺への都市機能、住宅、公共施設、生活サービス施設などの立地誘導により、中心地へのゆるやかな集約化が進んでいる。
- 地方都市の市街地の中心地が明確化され、その中心地間を結ぶ公共交通軸が確保されている。
- 市街地の中心地と集落などを結ぶ住民経営のコミュニティバスもネットワーク化されている。
- 空き家バンクなどを活用し、市街地外縁部から既存市街地内の空き家への移転斡旋が行われている。

**始まっている取組等**

**<市街地の核や公共交通を軸とするまちづくり>**

- ・都市機能等が多核分散した都市で、核間を接続する公共交通の利便性、定時性などを高めることで、交通軸の強化を図り、自動車から公共交通への利用転換を促進。
- ・さらに、市街地の核や公共交通による軸周辺へ、都市機能、住宅、公共施設、生活サービス施設などの立地を誘導することも考えられる。

**=公共交通を軸としたコンパクトなまちづくりへの取組（富山県富山市）=**

富山市では、今後の少子高齢社会を見据え、これまでの車中心の拡散した都市構造から脱却し、公共交通を軸としたコンパクトなまちづくりを進めている。

その一環として、2006年（平成18年）4月に、鉄道路線であった富山港線をLRT化。また、2009年（平成21年）12月には市内電車環状線化も完了。JR富山駅と市街地を中心としたLRTネットワークを構築する構想がある。運行本数を増やすとともに、バリアフリー化を図り、高齢者や体の不自由な方にも配慮している。

公共交通沿線への人口誘導による都市機能集積を図り、環境負荷の小さい都市づくりをめざしている。



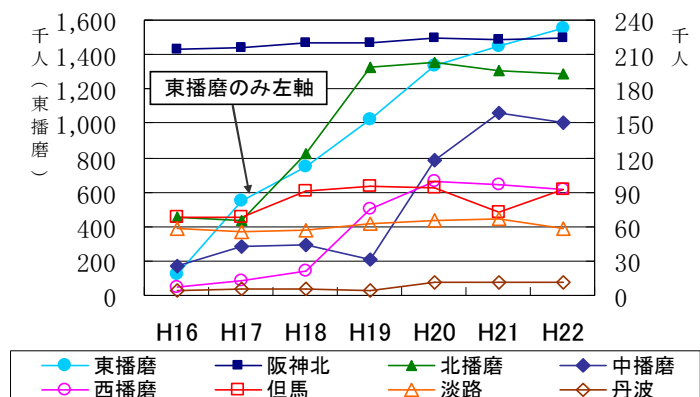
LRT(富山県富山市)

**<今後、医食住に加え、身近な“移”が生活の必須要素に>**

**【地域を支える足として、コミュニティバス路線がバスの代替手段に】**

—県内のコミュニティバスの利用者数の推移—（県補助事業ベース）

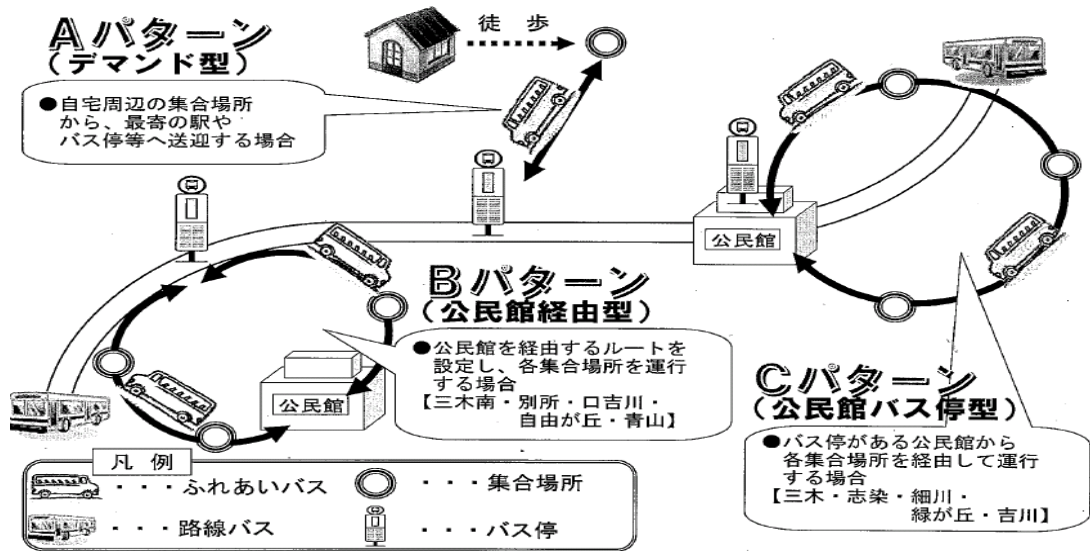
- ・ミニ公共交通の運営にあたって考慮すべき課題として、利用者の利便性のほか、既存の路線バスとの競合性、地域への公平性、事業採算性などが挙げられる。



※神戸、阪神南地域については補助実績なし  
 (出典：兵庫県交通政策課資料を基にビジョン課作成)

＝幹線道路までの交通の足を確保するコミュニティバス（三木）＝

地区の状況に合った形で運行パターンを定め、幹線道路までの交通の足を確保。まちづくり協議会の部会のひとつであるふれあいバス運行部会が運行を実施（2地区）。地域がガソリン代（自治会費から賄う）の負担と運転手の手配を行い、市は車両を無償貸与し、車検、任意保険、修繕費、運転手のボランティア保険を負担している。



＜歩ける範囲で生活できる「まちなかの機能」の再生＞

- ・郵便局・銀行、保育所などの生活サービス機能が徒歩圏内にない住居の割合が高くなっている。これは、地方都市では車の利用を前提とした都市構造となっているためと考えられる。
- ・今後の高齢化の進行により、車での移動困難者が増加することが考えられることから、まちなかに人口を集めるしくみづくりなど、地域の実情に応じた対策を講じる必要がある。

＝駅近立地にこだわった高齢者賃貸住宅（福崎）＝

駅近の便利なところで、高齢者本人も家族も安心できることをコンセプトに運営されている高齢者賃貸住宅。住宅から徒歩で2～3分の距離の診療所と連携するとともに、建物に併設したデイサービスを受けられるようにしている。

入居者の7～8割は福崎町内の方で、残りは姫路市。駅から徒歩3分で、家族の方にも気軽に訪れることができると好評を博している。



高齢者賃貸住宅(福崎)

＝質の高い地域医療を支える総合病院を核としたまちづくり（養父）＝

八鹿中心市街地では、公立病院の立地を生かした安心の拠点づくり、関連ビジネスの立地などによるまちの活性化が期待される。

医師不足などによる地域医療崩壊の危機の中、兵庫県はへき地医療のモデルとして、但馬地域において、①急性期・慢性期医療の分離、②診療科間の連携を円滑なものとし、患者の多様なニーズに応える「総合診療医」の養成を軸に医療体制の再構築を進めている。



公立 八鹿病院



**県民の意見**

- ▶ 水道筋には核店舗となるスーパーがあり、周辺店舗にも相乗効果が出ている。水道筋に行けば安くて良いものが買えるというイメージができていて、人が集まる。  
(水道筋商店街)

**専門家の意見**

- ▶ 中心市街地活性化がうまくいっていないのは、結局個人に頼っているから。中心地のテーマの明確化、コンセプトづくりが重要である。(県内食料小売販売企業)
- ▶ ロードサイドにまちの中心機能を集約していくのは難しいのではないかと考える。市役所や病院は、やはり住民が集まりやすい場所にあるべきものとする。(大学教授)
- ▶ これからはアーケードの撤去に金を使う時代。シャッター街を普通の街並みにしていくことも求められる。(大学教授)
- ▶ 病院、商機能が核になる要素。特に病院と、公共交通ネットワークはセットのものであり、病院は郊外へ持っていくべきではない。(2040年の兵庫研究会)
- ▶ まちなかの要素として、市役所、病院は人の出入りが多いため重要である。(大学教授)

**取組の視点**

- ◇都市の中心地のテーマの明確化、コンセプトづくり
- ◇総合病院など、生活の基幹施設の立地を推進するしくみづくり

(2) ②空き店舗、廃校舎などの空き空間が住民ニーズに応じて活用されている

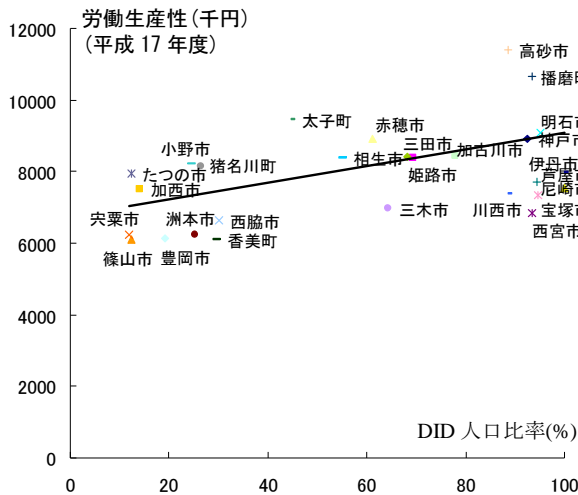
- －不要に広がった市街の縮小やまちなかへの生活機能の集約など、まちのあり方について行政・住民・企業の合意形成が図られている。
- －市街地の空き空間が、NPOの活動拠点やまちづくり協議会などが行う店舗の借り手の最適な組合せ（テナントミックス）の拠点となっている。
- －複数の空き家が、人口減により持続困難となった集落（村移りした集落）の住民やコミュニティの受け皿として活用されている。

始まっている取組等

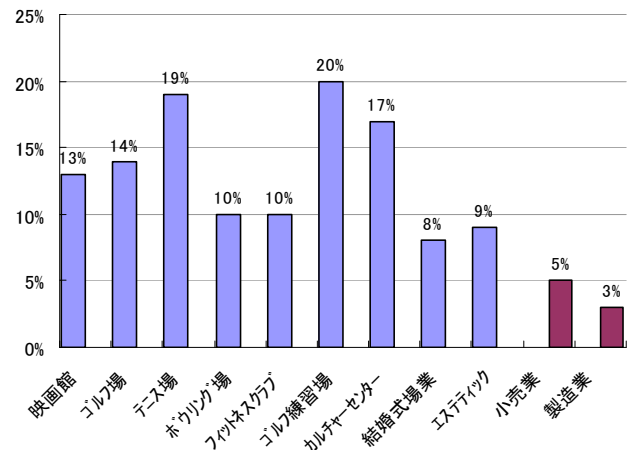
<人口密度が高まれば生産性が高まる傾向>

- ・同一市町内で人口が集中すると、労働生産性が高まる傾向にあり、サービス業ではその傾向が特に強く見られる。裏を返せば、人口の拡散や空き空間の点在がまちの活力を奪っていくとも考えられる。

【D I D人口比率と労働生産性】



【生産性の人口密度弾性値】



（出典：サービス業の生産性と密度の経済性（独立行政法人経済産業研究所））

労働生産性：就業者1人当たり総生産（名目）  
 D I D：人口集中地区。市区町村の区域内で人口密度の高い調査区（人口密度1km<sup>2</sup>当たり約4,000人以上の調査区）が互いに隣接して人口が5,000人以上となる地域。  
 D I D人口比率：D I D人口／全人口

上記は、立地する市区町村の人口密度が2倍になったとき向上する生産性を表している。サービス業では生産性が10～20%程度向上することが示唆されている。

県民の意見

- 無秩序に広がった「郊外」については、拡大のトレンドから縮小のトレンドへの切り替えが必要だと思う。（地域SNS「ひよこむ」での意見）

専門家の意見

- 人口は間違いなく減少するので、これ以上まちを拡散させないことが重要。真ん中にどれくらいまとまりを持たせられることができるかが問題である。（大学教授）
- 広いところで広くサービスをするのは行政コストが高くつく。集約して集中的に資源を投下するというのが大きな政策の流れだろう。（県内食品小売販売企業）
- 都市全体で減少する人口総量の分担のあり方、ある地区で維持すべき人口規模などについて、地区住民だけでなく、全ての市民で合意形成を図っていく必要がある。（大学教授）

### ＜郊外部の疎住化への対応が重要に＞

- ・スプロール現象により広がった市街地で、人口減少、高齢化の進行により持続が困難になる地域では、市街地の縮合を前提としたまちづくりを考えていくことも必要となる。
- ・無人化に至る過程での、コミュニティバスや宅配サービスも整備など、生活サービスの維持も考慮しておく必要がある。

#### 専門家の意見

- ▶ 過去にさかのぼって都市がどのように成長してきたかを見ることで、都市が縮むとした時のガイドとなるものがどこにあるのかのヒントが得られるのではないかと。(大学教授)
- ▶ 近代以降構想されたものの十分に実現できなかった計画、構想(例：首都圏グリーンベルト)を再評価して、実行する機会とすることも考えられる。(大学教授)

### ＜まだらに生じる空き地の有効活用＞

- ・市街地などにおいてまだらに生じる空き地を、近隣住民などが市民農園やガーデニングで活用している姿も考えられる。

#### 専門家の意見

- ▶ 都市計画のレベルで一様に収縮するという事はあり得なくて、まだら模様で収縮していく。例えば鉄道沿線レベルで見ると、駅前を中心に収縮していくし、個々の団地レベルで見ると、団地のセンター地区を中心に収縮していくし、戸建て住宅地ではコミュニティの中で収縮が始まる。
- ▶ まだら模様でできる空き地を農地に変えていくような都市計画制度を考えていけば、縮小時代のまちづくりのしくみにつながる可能性がある。(2040年の兵庫研究会)

【空き地の発生形態】

		空地の規模		
		小規模	中規模	大規模
空地の分布	単独 緑地・農地の中に存在	 スポット (spot)	 アイランド (island)	 プラトウ (plateau)
	群 低密な市街地の中に存在	 ポーラス (porous)	 アーキペラゴ (archipelago)	

(出典：都市縮退時代の都市デザイン手法に関する研究(平成19年度国土政策関係研究支援事業 研究成果報告書))

### ＜中心市街地の活性化が必要に＞

- ・経営者の高齢化や車社会化の進展による郊外やロードサイドへの大型小売店舗の立地などの影響により、衰退する中心市街地も増加傾向にある。
- ・中心市街地の活性化には、基幹施設となる総合病院やスーパー、ドラッグストアの立地や集客力のあるオンリーワンショップの育成を進め、集客力の向上を図ることも効果的である。
- ・商店街としての再生が難しい場合は、病院、デイケア、保育所、配食サービス、コミュニティカフェ、工房、アトリエなど、商店以外の機能を入れて魅力を高めるのも有効と考えられる。
- ・再生の見込みのない商店街については、アーケードの撤去を促進するなど、シャッター街を普通のまちなみに変えていくこともひとつの方策といえる。



＝中心市街地の活性化の取組（豊岡）＝（再掲）

- ・豊岡駅通商店街では、市と協力して空き店舗出店者を支援する取組を実施。卓球専門店、蒸しパン店、白いたい焼き屋など、これまで商店街にはなかったタイプの店舗の進出も見られるようになった。
- ・宵田商店街では、地場産業である「カバン」をテーマとしたオンリーワン型の商店街活性化の取組を実施しており、カバン屋のほか、異業種の店舗でもカバンを扱っている。



豊岡駅通商店街



宵田商店街

＝サブリース※を活用し空店舗を廉価に貸し出し（加古川）＝（再掲）

寺家町商店街では、市役所、商工会議所、観光協会、地元企業が構成員の「チームかけはし」が、第3セクターならではの信用力を元に空き店舗の活用取組を実施。「ハード整備はしない」、「イベントはしない」をポリシーに、サブリースを活用し、空店舗を廉価に貸出すことで、閉まっているシャッターを開けようという活動をしている。



寺家町商店街(加古川)

写真：「チームかけはし」の仲介により、長年空き店舗となっていたスペースを活用してオープンした古着屋

※サブリース：不動産会社など（サブリースター）が所有者から建物・付帯施設などを一括賃借し、運営管理を請け負うとともに、第三者に小口貸借するしくみ。

＜公共施設の空き空間を活用して企業を誘致＞

＝学校跡地が企業と地域のニーズに一致（養父）＝（再掲）

養父市は学校跡地に企業を誘致。旧西谷小学校では、県内企業が醸造酢などを製造する食品工場を開設。体育館にタンクを設置し、職員室は事務所として利用している。



工場になった小学校(養父)

取組みの視点

- ◇市街地の無秩序な拡張の抑制
- ◇維持すべき地域と縮合させていく地域の区分けに関する住民の合意形成
- ◇まちの創造的な縮合に対応した計画づくり
- ◇地域ニーズに応じた空き空間の活用